

豊川進雄神社の能人形面

飯塚恵理人

一 はじめに

豊川進雄神社は愛知県豊川市の中心部、豊川駅・豊川稲荷のすぐ近くに位置する神社である。この進雄神社には現在一八面の近世に遡る能人形面が所蔵されている。このうち一七面は豊川桜が丘ミュージアムに保管されている。これらの寄託されている進雄神社所蔵面のうち一四面は、昭和四七年一月三〇日付で豊川市の文化財に指定されている。残りの一面は鼻高天狗面で、進雄神社に保管されている。この鼻高天狗面は面裏に寛文八年という記載があり、その当時に作られたと考えられる。これらの能人形面はすべて現在の祭礼では使われておらず、昭和・平成になって作られた複製の面が使用されている。

この能人形面に最初に着目されたのは、管見によれば、元能楽協会名古屋支部支部長で、宝生流シテ方の内藤泰二師と、能楽評論家西田三好氏の二氏である。内藤師の『眼・名古屋から(注一)』には二氏が進雄神社に一緒に行かれたことが記されている。内藤師(注二)

は、「宝生」(昭和四五年七月号、四六年四月号、四六年十一月号)にそれぞれ同社蔵の「黒髭」「瘦男」「若男(所蔵名…中将)」について、紹介された。また西田氏(注三)は「豊川進雄神社の古能面」という題でこの調査記録を「観世」(昭和四五年七月号)に載せられた。現在豊川市役所には、昭和四五年四月二三日付の西田氏の調査記録(注四)(和文タイプによる)が残されている。

本稿では、内藤師・西田氏の研究を踏まえ、能人形と豊川進雄神社の天王祭りとの関係について考える。同時に、これらの能人形がどのような人々によって寄進されたかについて考察する。さらに能人形が現在の天王祭りでのように使用されているのかについて述べたい。なお、保田紹雲氏の御教示により、能人形面の特徴についても述べることにする。考察の対象は、現在桜が丘ミュージアムに寄託されている一七面と、進雄神社に所蔵されている鼻高天狗面とする。

二 進雄神社の祭礼と能人形面を寄進した人々

豊川進雄神社の祭礼は、能人形面に「豊川天王」と記されているように、近世より「天王信仰」に基づいた祭礼である。この地方の天王信仰は、松山雅要氏(注5)によれば「宝飯郡は、鎌倉時代・津島牛頭天王社の鎮座する尾張海東郡の領主・大江一族が宝飯地方に入り、室町時代になって天王信仰が盛んになりました」と、津島神社の影響を受けている。現在豊川進雄神社の祭礼は「綱火」と言われる祭礼花火で有名である。この「綱火」の起こりは「豊川村庄屋・中田四郎右衛門文書」(以後「中田家文書」と略称)に

天王御祭り六月十九日しんがく(神楽 之事

一 寛文元年丑ノ六月初り申候、花火、其外つるしちやうちん仕、車と山へ縄をはり縄火(綱火)、(山車引き綱)大モミ申也。大からくりも有り(後略)

とあり、寛文元(一六六一)年に始まったことが知られる。この「綱火」の始まった事情については、松山雅要氏(注6)が、

小笠原義忠が、二十一才の時に花火を再興したものです。しかし、費用はかきみ運営は儘ならぬものでした。

そこで、四郎右衛門は、若い者と呼びかけ権現堂脇にある荒地(現在の東部中学校敷地内)の開墾を思いたち、反対者があつたにもかかわらず、「我、若年に候とも末の世までの宝と成さん。」と米八斗の花火畑を開墾し祭礼の費用としました。この花火畑は、享保二年(一七一七)には六石三斗になり、さらに天明五年(一七八五)には、二十一石二斗に増加しています。

また、一方では、若い者に花火の製法を教え、若い者を東西二組に分け花火を競わせました。これが、現在の豊川進雄神社

の花火祭りの起こりとなっています。

若者を東西二組に分けたのは、豊川村が相給地であつたためかと思われたが、当時は、天領であり、組を分けたのは純粋に花火を競わせるためであつたようです。

※相給Ⅱ一村が二人の領主に分けて治められていたこと。

と述べておられる。寛文年間、綱火が行われるようになったこと、その費用を賄うための田が開墾されたこと、西・東に若い者が分れて綱火を競うようになったことなど、進雄神社の祭礼の形がそれ以前と大きく変わり、盛大に行われるようになった節目であつたと考えられる。

現在進雄神社の能人形面の年記のうち最も古い物は寛文五年で、神谷右近が寄進したと記されている六面にある。これらの面は、寛文年間に天王祭りが盛んになった際に寄進されたものと考えられる。この神谷右近は、同じ「中田家文書」に

宮座真入之事

- 一 小笠原四郎右衛門 一 加藤孫右衛門 一 神谷右近
- 一 田中助市 一 鈴木清助 一 鳥居吉十
- 一 小林彦左衛門と申者、貞享三寅之年初而入。

小林等家つむれ申二付、末子筋二て立□□。」

と「宮座」の三番目に記されている。「宮座」は進雄神社の祭礼を取り仕切った豊川の有力者である。筆頭は「綱火」を始めた小笠原四郎右衛門義忠のことである。この記録から、この六面の能人形面を寄進した神谷右近は、「宮座」を構成する豊川の有力者であつたと考えられる。

また(17)の「小尉」には年記は記されていないが「稲生伊兵衛寄進」と記されている。この稲生伊兵衛については、「中田家文書」の、寛文十一年の称宜職をめぐる紛争に係りして、

又、寛文十一年亥ノ年 右之公事大ニまげ申二付、神主右近ニ

申懸候は、祢宜職ハ、桑名藤太夫ニ而候間を藤太夫ニ渡し候へど、藤太夫ニい申候稲生伊兵衛と申人之家来祢兵衛と申者い申候。此伊兵衛ハ、鈴木八右衛門様筆故、庄屋、又、三人之師人、地下三分一程一ツ成。祢宜ハ、弥兵衛の子・金蔵ニさせ可申と申懸候へ共、成不申候間、(後略)

と名前が見られる。この資料から稲生伊兵衛が当時天領であつた豊川を治めていた代官の鈴木八右衛門の筆であつたことが知られる。

稲生伊兵衛は宮座の構成員ではなかつたようであるが、やはり豊川の有力者であつたと考えて良いだろう。また、寛文十一年の文書に稲生伊兵衛の名前が乗ることから、(17)の「小尉」も寛文年間あたりに寄進された可能性が強いと考えられる。

現在進雄神社に保管されている寛文八年六月の寄進の鼻高天狗面の寄進者は面裏に高須重太夫と書かれている。この高須重太夫は、現在の豊橋の高洲町にあたる高須新田の開発者である。豊橋市図書館橋良文庫の「高須新田、土倉新田、下野新田開発諸記録」(蔵書番号 一二〇六〇一〇一八)を引用すると、

寛文五乙巳年

吉田御城主小笠原山城守長頼様御代

高須新田

土倉新田 開発

吉田本町 高須久太夫

同 上 傳町 眞弓佐平

豊川村 高須十太夫

高須嘉兵衛(八文字)

摂州池田ノ出 吉田住

土倉五郎兵衛

右五人元締

抑寛文五乙巳年二月吉日ヨリ馬見塚村神明山ヨリ築始、夫ヨリ西エ西ノ山、鳥塚、雉子塚、牟呂村、坂津下へ築立、汐留ノ場

所ハ鳥塚北石掛、鳥塚東蛇湊両所ナリ、右両新田願成就。巳午ノ両年歟下ニ被下置、寛文七丁未年ヨリ御免付ニ相成御上納仕候。

高千式百三拾三石壹斗四舛三合壹勺 盛 十

御免壹ツ五分

鳥羽十左衛門

後藤 半助

塩田久右衛門

高須村 久太夫との

五郎兵衛との

となる。新田を開発する元締として名前が挙げられており、かなりの財力があつたと考えてよい。同文書の「家別百性覧」には「高須十太夫 元メ 二屋敷小屋留主居住」とあり、新田内にも「小屋」は持っていたようであるが、実際には住まず、豊川に住んでいた。

この高須新田の開発と高須重太夫の名は『豊橋市史(注7)』『豊川進雄神社天狗面』豊川村・高須十太夫(注8)にも載る。

(12)(13)の面は、面裏の記述から、元文四年に林左太夫が作り、林忠助が彩色を行つて中田左中に代わつて奉納したものである。この中田左中は、享保三(一七一八)年「三河国宝飯郡豊川村指出帳(注9)」(以後「享保指出帳」と略称)に、

一 御除地 正一位牛頭天王社 九尺四方 瓦葺

慶長御本帳之節方如斯ニ御座候高ノ外

高式拾壹石式斗壹合 神主 中田左中

反別式町三反三畝拾七歩 盛九代

此宮祭祀六月十九日 廿日神楽 花火仕候

往古方有来候

とあり、進雄神社(文中には「牛頭天王社」とある。)の神主であつたことが知られる。また作者の林左太夫というのは、この「享保指

出帳」の奥書に

三州宝飯郡豊川村

庄屋 彦太夫

享保貳拾年卯三月

庄屋 四郎右衛門

組頭 左太夫

同 小平太

野田甚五兵衛様

百姓代 惣七

御役所

同 三郎平

とある組頭の左太夫ではないかと思われる。この人物はこの資料に進雄神社と関係しては書かれていないが、村の有力者であったことは間違いないだろう。面作成という意味では地元の人素人の作ということとなる。(14)の面も寛保二年の年記を持つ。「願主 林氏」とあるが、この「林氏」も左太夫かその一統であると考えられる。

能人形面はいずれも村の有力者の寄進という形をとっていたことがわかる。また、年記のある人形面は寛文年間から、元文・寛保あたりまでの約八〇年間に作られている。

三 桜が丘ミュージアムに寄託された能人形面の特徴

面裏の年記等に関しては、一覧表にまとめたので、個々の能人形面の特徴及び保存状態について述べる。同社の能人形面は基本的には野外の能人形に使用する実用品であった。従って、彩色などの落剥・浮き上がりが目立つ物もある。また、面の一部が欠落したあとに、改めてひも穴をつけているものなどもある。現在の状態のよいものばかりではないが、これは実用品としての役を果たしてきたことによる。

1 (は) 童子

彩色の浮き上がり二〇%

2 (ほ) 怪士

右顔のひも穴以下割れて欠落。額中央から鼻にかけてと左顔ひも穴前にひび割れ。眼金具欠落。彩色浮き上がり五〇%、毛書きは乱暴な後補で、塗り替えられている。頭上部にキリ穴あり。

3 (ろ) 怪士

左ひも穴及びあごのひび割をうるして修理。眼金具欠落。彩色浮き上がり。毛書きは乱暴な後補で、塗り替えられている。浮き上がり三〇%。頭上部にキリ穴あり。

4 (に) 童子

彩色の浮き上がり二〇%。塗り替えられている。1と4はよく似ている。

5 (よ) 獅子口

両側面とあごに4本のひび割れ。いずれもうるしくそで修理。紙はり彩色で塗り替えられている。毛書きやくまどりなどは乱暴な後補。彩色の浮き上がり八〇%、剥落三〇%。額両側に穴があり、穴から上が割れている。この穴はかぶり物を縛り付けた穴と考えられる。同社にはこの5以外に13、14の二面の獅子口が所蔵されているが、5はこの二面に比較して古い。内藤泰二氏(注10)は伊勢和谷座旧蔵の獅子口について述べる際、「豊川進雄神社の諸面と表裏とも共通点が多く、同社の墨書銘から推して、古元休と同時代(江戸初期)又はやや以前の作と思われます。」と言われる。

6 (わ) 黒應見(所蔵名…大應見)

彩色の浮き上がり二〇%。彩色上に後補でニス塗り。色が黒いの

7 (い) 邯鄲男(所蔵名…中將)

右顔ひも穴以下欠落。右顔ひも穴はその後に開けてある。後補の

毛書きが弱い。まゆ毛書きはハネ上げ。えくぼがあるので、中將で

はなく邯鄲男と判断した。彩色は塗り替えがなされている様で、邯

鄲男の毛書きとは様式が違って来ている。彩色の浮き上がり二〇%

8 (と) 小面

小型の面。ひたい上部にキリ穴。(面裏に見える。表は補修で見え

ない。)裏は縦鉋目。左ほほ部は大きい横鉋目。耳・鼻・顎のくぼみ

はくり小刀細工。彩色の浮き上がりは顎・額に計一〇%。

9 (る) 若い男面

小型の面。彩色の浮き上がりは見られない。眼に朱が入れてある。

眼の角度や形状の類似性から8、9は同一作者によると思われる。

10 (へ) 瘦男

裏斜め鉋目。くぼみはくり小刀細工。目金具は黄土色。毛書きは

細く弱い。紙張り彩色で塗り替え。剝落周辺部に五%程度のみ。1・

4の童子、7の中將と同一人による補修の趣き。内藤泰二氏(注リ)は

この面について、

延宝九(一六八一)豊川郷天王人形面と墨書あり、古元休没

後九年目にあたります。

世の本流は近江・洞白・古元利・満茂等多士済々の一隅で、

こうした傍系の作もそれなりの需要に应运っていたのでしよう。

これも裏の眼のくの方が宝来系で、鉋眼は横斜。和谷座の⑨(飯

塚注・瘦男 伊勢一色和谷座旧蔵)と通ずる所があります。

と言われる。

11 (リ) 小飛出

目は金具でなく金泥塗、裏彫りも荒く雑でひも穴位置も低い。非

能面。額上部鉋穴あり。

12 (か) 黒癪見(所蔵名・大癪見)

6の写しと思われる。非能面。毛書き・彫りとも6よりも落ちる。

裏彫りは縦鉋目で雑。ひも穴は耳の下になっている。重い。

13 (ち?) 獅子口

(ち)の文字はないが、(ち)にあたる能人形面がないので、ある

いはこれがそれに相当するのではないかと思われる。5の写しと思

われる。非能面。毛書き・彫りともに5より落ちる。裏彫りは縦鉋

目で雑。重い。

14 (れ) 獅子口

5、13の不完全な写し。非能面。表裏とも生地。裏彫りは縦鉋目

で荒く雑。重い。

15 (を) 黒髭

面裏に、直径16ミリの丸輪黒印あり。美しい横鉋目。本格的な能

面。額上部に鉋穴(後であけたもの)。毛書きも後補。彩色は赤みが

かった黄土色。目金具にニス塗り(後補)が見られる。この「黒髭」

について、内藤泰二氏(注リ)は

西田三好氏によつて今回斯界に紹介された新資料です。同社

の面は祭祀の山車に立たせる人形の面として寄進されたもの

で、その由皆銘記がある中に、これと平太の二面には銘記がな

いので、新しく加わった山車用に既成の能面が流用編入された

ものと思われる。同社蔵面中現行能面として使用可能な唯一

のものです。

型は⑤(飯塚注・宝生準本面 越前出目作)を忠実に写し、

裏は横鉋目で薄鼠色の擦込み。鼻の上左眼寄りに直径2糎余の

細輪形焼印跡が見えます。

と述べておられる。

16 (つ) 平太

面裏に、直径16ミリの丸輪黒印あり。額の黒星は紙張りの丸。左

ほほ部割れ欠。表・裏ともニス塗り(後補)。彩色浮き上がりなし。

17 (ぬ) 小尉

左ひも穴以下欠落。欠落後再び穴をあけてひもを通してある。尉

髪は欠落。彩色浮き上がり二〇％。

四 桜が丘ミュージアムに寄託された能人形面の特徴

1から7は裏生地で塗りがなく、刀目は大きい横鉋目、目穴及び鼻のくぼみはくり小刀による細工であるなど共通点が多い。1から6が寛文五年、7が寛文六年の寄進で、これら全てがその頃作られた能人形面であることを考えると、同一作者の手によるものと考えて良いように思われる。また、8と9はともに小型で明らかに能面ではない。ともに木地裏で塗りがなく、目の角度が急である。目及び鼻・顎のくぼみはくり小刀細工である。この二面は同一人により作られたものと考えられる。また1、4、10は毛書きより見て、同一人により補修されたと思われる。

西田三好氏(注13)は進雄神社の面について

今回発見された十七点の面は能面であることは間違いなく、面の裏面に寄進年月日が墨書されていることから、これより起算して三百年以上または二百数十年以上を経過していることは明らかである。寄進された面の製作はそれ以前のもので、彫刻及び彩色技法の素朴な点などからみて、それより遙かに年代を遡るのぼったものであろうと想定される

と言われるが、彫刻から見て、その内8、9、11、12、13、14、17の七面は明らかに能面ではない。しかしそれ以外の一〇面は能面として製作されたものを転用したものと考えても不自然ではない。しかし、1から7の裏面墨書きが生地に書かれており、それに汗等によるにじみもないことを考えると、能面として舞台に使用された形跡はないと言える。これらの面は製作後直ちに人形面として寄進されたと推定される。

進雄神社の人形面は彩色の直されたものが多い。面の彩色は水分に弱く、雨に当たったりすれば毛書きは流れてしまう。この時素人の手によって彩色がやり直され、面の名称が見分けにくくなったものもある。面の上部の穴は、かぶりもの(頭にのせる毛)と面を固定したものである。この穴が彩色補修によって塗りつぶされたものもある。また6、16の面は表面がニス塗りとなっているが、これは雨対策として行われたものである。

結果として、1から7及び10はいたみと彩色のまずさにより、16はあご部の割れ欠落により、現在能面として使用に堪えるものは15の黒髭のみである。非能面の各面はいずれも地元の人々によって製作されたものであろう。

五 進雄神社に保管されている鼻高天狗面

桜が丘ミュージアムに寄託されている面以外に近世の面として、進雄神社には天狗面が一面遺されている。これは鼻高天狗の面で、面裏に「神主 神谷右近太夫 寛文八申年 六月吉日 奉寄進 高須重太夫」という墨書がある。寄進が六月であることから、天王祭に用いる能人形面として作られたことは確実である。

面は鼻高面であるが、顔面の形状は能面の大臍見を少し(約一割)大きくしたもので、その鼻先のみを変形して鼻高天狗としている。面裏の彫刻は浅い斜めの鉋目で揃っている。目や鼻の穴などの細工も能面のそれと同じである。薄い拭き漆を施してあるように見える。目の金具の形や細工も良い。塗りは和紙を下地に張った上に、胡粉を膠で塗った「紙張り採色」と呼ばれる技法で、能面にはよく行われている方法である。面の材質は良質の木曽檜である。木取りは正板目、鼻先を寄木にしている。鼻先の木取りは本体と直角にし

ている。材料・金具・彫刻技法・彩色技法いずれから見ても、能面の専門職人によって制作されたと考えてよいように思われる。

この時代の能面職人は、世襲の面打家に属していたと考えられ、世襲面打家（越前出目家・大野出目家・井関家・児玉家・弟子出目家）か、そこで修行した職人によって制作されたものであろう。さらに限定するならば、この種の面を制作するのは地方に帰った弟子職人のように思われる。

六 現在の祭礼と能人形面

現在の祭礼において、能人形面は「東山」「西山」という、東西それぞれの組の山車にそれぞれ一体ずつ立てられる等身大の人形に用いられる二面と、「伊勢参り」という「神幸祭」の最後尾の車に乗せられる等身大の人形一体に用いられる一面の合わせて三面である。神幸祭は三日間行われる祭の最終日に神輿が進雄神社と元宮とを行列して往復することである。

桜が丘ミュージアムに保管されている(2)(3)の怪士には、箱に「東山 楠正成面」「西山 源頼光面」と書かれ、(4)の童子には、やはり箱に「伊勢参り」と書かれている。この「伊勢参り」の面には木箱もあり、それは蓋に「笠鉾面」、蓋裏に「出口町用」と書かれている。

これらの面はそれぞれ「東山」「西山」「伊勢参り」の人形に用いられたものと考えられる。平成九年の「西山」の面は「怪士」ではなく「般若」のような鬼の面のように見える。ただし、松山雅要氏によれば、現在の祭礼においても東山は楠正成面、西山は源頼光面で従前通りであるとのことである。「東山」「西山」の人形はともに前に稲が置かれるから稲につく害虫の駆除、災厄の駆除を祈るもの

ではないかと思われる。

「伊勢参り」は荷物を背負い、笠をかぶった旅装束の人形で、参詣人の扮装をしている。伊勢へ行く参詣人を模したものと考えられるが、この車を出すことによって行列の最後がここであることをしめすという実質的な意味もあつただろう。

同社の能人形面は前述のようにどれも実際に用いた痕跡がある。

このようなことを考えると、近世には面は三面のみではなく、多く用いられたのではないかと考えられる。西田氏は、「この祭りにうたわれる笹踊の唱歌には『……天王の祭は七輦の車に十二本の笠鉾、波にゆられて……』とあるから、昔時は七体の人形が飾られていたと思われる。」と言われる。「笹踊り」というのは、三人で行う田楽踊りの一種で、西田氏が挙げられるのはこの踊りの時周囲を囲む若者が歌う歌の歌詞である。この歌は現在でも謡われている。西田氏の一つの車に一体ずつで七体使用したのではと言われるが、これらの人形を全て車に乗せて使用したとすれば車一つに二体は載せたと考えられる。また「伊勢参り」が「笠鉾」面であるとすれば、「十二本の笠鉾」にこれらの人形を何らかの形で飾ったのかも知れない。この能人形面の使用方法については現在の所記録等管見にない。ご存じの方がいらっしゃればぜひご教示頂きたいと思う。

七 おわりに

豊川進雄神社で能が興行された記録は残っていない。能人形面はあくまで祭礼の能人形のために寛文年間に祭礼が盛んになった頃から整えられたものと考えてよからう。これらの能人形面は、祭礼の中では、悪疫除去・豊作祈願などの意味を持って用いられたと考えられる。しかしながら、これらの能人形面が「能人形」と「能」と

いう名前を持ち、いずれも「能面」を模して作られていることは、近世の人々の「能」「能面」に関するところえ方を考える意味で参考になるだろう。

内藤泰二師の遺されたメモの内には人形面の寄進年と面打の没年を比較したメモがあり、能人形面が寄進された時期が、江戸の面打ち家においてさかんに大面名が作られていた時期に当たっていたことに関心を示されている。寄進された能人形面に、鼻高天狗面のようには明らかに能面の細工を熟知した人物が作ったと考えられる面が存在することは、能人形面の制作に能面作家の関与を疑わせるものである。面の作者はわからないが、当時の能面のマーケットとして、このような人形面の需要が僅かではあったものの存在したことは重要であろう。

現在愛知県内では、津島の天王祭りの朝祭りでも能人形が用いられている。津島の能人形面はまだ拝見する機会に恵まれていないが、前述の通り豊川の天王信仰が津島神社の影響に始まったとすれば、この能人形も津島神社の祭礼の能人形の影響を受けているかも知れない。それらは今後の課題とさせて頂きたい。

- (注1) 『眼・名古屋から』 内藤泰二著 鍵雲会 昭和六三年九月発行 五七頁 西田三好氏の項
- (注2) 『観る ―愛面居士の能面探求弁―』所収、引用は同書による。内藤泰二著 内藤泰二著述集刊行会 わんや書店 平成五年二月発行
- (注3) 『豊川進雄神社の古能面』 西田三好 「観世」 昭和四五年七月号 三〇―三三頁
- (注4) 『豊川の能面』(仮称)。「所有者 豊川進雄神社 調査日 昭和四五年四月二三日 調査 能評家 西田三好」と記す。) 『豊川進雄神社』所収

松山雅要 私家版 平成七年五月改定

- (注5) 「豊川進雄神社」「神社の歴史」の項 松山雅要 『豊川進雄神社』所収 注4
- (注6) 「豊川進雄神社」「小笠原文書」の項 松山雅要 『豊川進雄神社』所収 注4
- (注7) 『豊橋市史 第二巻』 昭和五〇年一月発行 豊橋市史編集委員会編集 豊橋市発行 六九三―六九五頁
- (注8) 『豊川進雄神社天狗面―豊川村・高須十太夫』 松山雅要 私家版 平成一五年一月発行 全一四頁
- (注9) 『豊川市史 資料編』 享保二〇年 資料番号七二 村差出明細帳 一三一頁
- (注10) 『観る』 注2 一四〇頁上段
- (注11) 『観る』 注2 一五八―一五九頁上段
- (注12) 『観る』 注2 一三三頁中段
- (注13) 「豊川進雄神社の古能面」 注3 三〇―三二頁

補記

貴重な資料の閲覧を許可された豊川進雄神社・豊川桜ヶ丘ミュージアム文化課、豊川市史編集室に心より感謝申し上げます。また本稿の掲載を許可いただきました豊川連区長星野史郎氏、副連区長小笠原茂氏、副連区長森島健夫氏、氏子総代長鈴木勝巳氏、氏子総代小川満氏、氏子総代中林良雄氏に心より感謝いたします。本稿をなすにあたって豊川の歴史については豊川市史編集室の田中康弘氏・一ノ瀬礼三氏、豊川郷土史研究会の松山雅要氏の御教示を頂きました。特に高須重太夫関連の資料は全て松山氏に御提供頂きました。また現在の祭礼については藤井孝夫氏に御教示を頂きました。また能人形面の特徴に関しては保田紹雲氏の全面的なご教示を頂きました。記して感謝申し上げます。本研究は平成九年度文部省科学研究費奨励研究(A)「東海地域近世・近代能楽資料の収集と整理」(課題番号:〇九七一〇三一六)、平成一四年度科学研究費基盤研究(C)「東海地域能楽資料の収集と整理」による成果の一部となります。

いづか・えりと／文化情報学部助教授
E-mail:erto@c.sugiyama-u.ac.jp

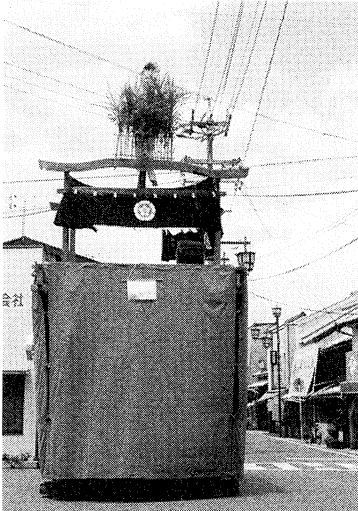
(1) 豊川進雄神社所蔵能人形面（桜が丘ミュージアム寄託分 17 面）

文	番号	旧分類	一般名称	所蔵名称	能・人形面	材質	木取	裏刀目	裏地	彩色	書き入れ等	縦	横	奥
○	1	は	童子	童子	能面	檜	四方征	横鉋目	木地	紙はり彩色	は 三州宝飯郡豊川郷 寛文五乙巳年 奉奇進人形面 六 惣氏子 天王神主神谷右近	20.7	13.7	7.2
○	2	ぼ	怪士	快士(東山 楠正成面)	能面	檜	木目取	横鉋目	木地	紙はり彩色	は 三州宝飯郡豊川郷 寛文五乙巳年 奉奇進人形面 六 惣氏子 天王神主神谷右近	21.5	14.3	8.3
○	3	ろ	怪士	快士(西山 源頼光面)	能面	檜	征目	横鉋目	生地		ろ 三州宝飯郡豊川郷 寛文五乙巳年 奉奇進人形面 六 惣氏子 天王神主神谷右近	21.3	14.5	9
○	4	に	童子	童子(伊勢参り面)	能面	檜	征目	横鉋目	生地	紙はり彩色	に 三州宝飯郡豊川郷 寛文五乙巳年 奉奇進人形面 六 惣氏子 天王神主神谷右近	20.8	14.2	7.9
○	5	よ	獅子口	獅子口	能面	檜	四方征	横鉋目	生地	紙はり彩色	よ 三州宝飯郡豊川郷 寛文五乙巳年 奉奇進人形面 六 惣氏子 天王神主神谷右近	21.7	16.8	10.7
○	6	わ	黒塚見	大塚見	能面	檜	四方征	横鉋目	生地		わ 三州宝飯郡豊川郷 寛文五乙巳年 奉奇進人形面 六 惣氏子 天王神主神谷右近	22	16.8	10.9
○	7	い	邯鄲男	中將	能面	檜	四方征	横鉋目	生地		い 神主 寛文六年 豊川村天王 惣氏子 午六月吉日 と 延宝九年三州宝飯郡豊川 奉奇進 惣氏子 神谷右近	20.3	14.8	8.2
○	8	と	小面	小面	非能面小型	檜	四方征	縦横乱鉋目	生地		と 延宝九年 豊川郷 奉奇進 惣氏子 天王人形面	19	11.6	6.5
○	9	る	若い男面	若い男面	非能面小型	檜	四方征	上半：縦下：横鉋目	生地		る 延宝九年改 奉奇進 惣氏子 天王 豊川郷	18.4	11.5	6.5
○	10	へ	瘦男	瘦男	能面	檜	征目	斜鉋目	生地	紙はり彩色	へ 延宝九年 豊川郷 奉奇進 惣氏子 天王人形面	20.5	15.2	8.8
○	11	り	小飛出	小飛出	非能面	檜	？	荒い鉋目	生地		り 延宝九年 西六月吉日 奉奇進 豊川郷 天王人形面	21.9	15.6	18.9
○	12	か	黒塚見	大塚見	非能面	檜	四方征？	縦鉋目 荒い	黒漆		か 三州宝飯郡豊川郷 元文四年未六月吉日 さいしき 林忠助 奉奇進人形面二ツ 天王神主中田左中代 作者 林左太夫	11.8	17.1	11.2
○	13	(不記 ちか？)	獅子口	獅子口	非能面	？	？	縦鉋目 荒い	黒漆		ち 三州宝飯郡豊川郷 元文四年未六月吉日 さいしき 林忠助 奉奇進人形面二ツ 天王神主中田左中代 作者 林左太夫	22.4	14.5	10.1
	14	れ	獅子口	獅子口	非能面	ほう？	逆木目	縦鉋目 荒い	生地		れ 奉納御宝前 寛保二壬戌年四月吉日 願主林氏	22.5	15.5	10
○	15	を	黒髭	黒髭	能面	檜	征目	横鉋目	黒漆		を	21	14.9	9.2
○	16	つ	平太	平太	能面	檜	正征目	横鉋目	黒漆		つ 五月九日 天王人形面	20.6	14.5	7.9
○	17	ぬ	小尉	小尉	非能面小型	檜	正征目	横鉋目	生地		ぬ 五 稲生伊豆 寄しん	18.3	8.3	7.4

(2) 祭礼と能人形（平成9年7月20日神幸祭）



③ 東山能人形



② 西山の全体



① 西山能人形

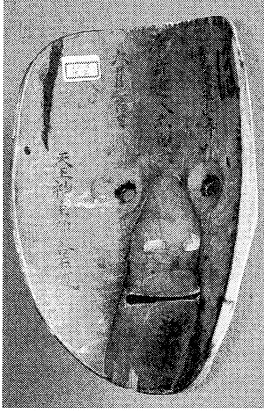


⑤ 「伊勢参り」の出発

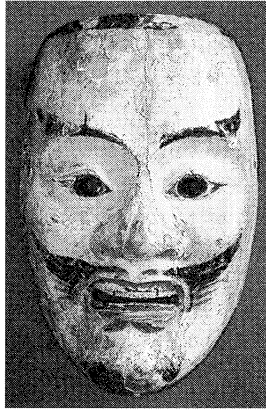


④ 伊勢参り

(3) 進雄神社所蔵 能人形面 (桜ヶ丘ミュージアム寄託のものは、その面の番号を記した。)



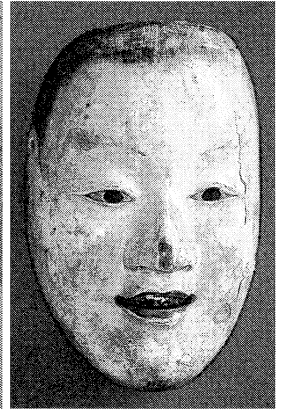
② 怪士 (面裏)



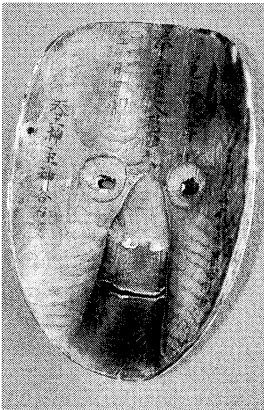
② 怪士



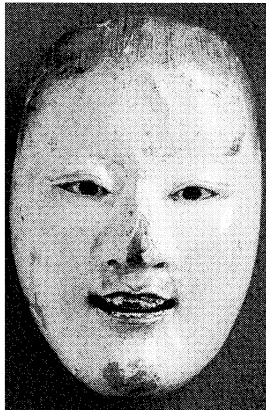
① 童子 (面裏)



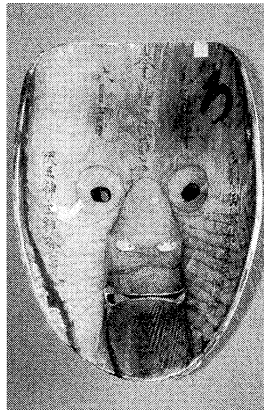
① 童子



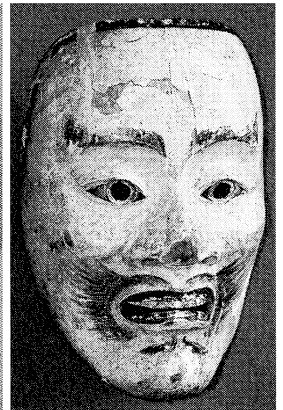
④ 童子 (面裏)



④ 童子



③ 怪士 (面裏)



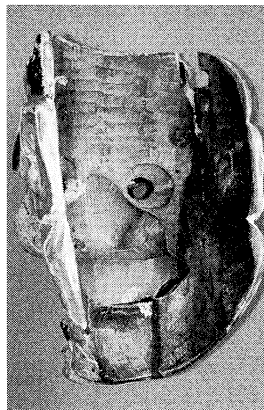
③ 怪士



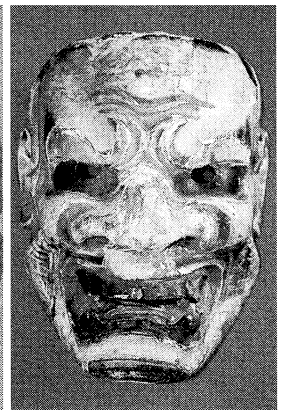
⑥ 黒癒見 (面裏)



⑥ 黒癒見



⑤ 獅子口 (面裏)



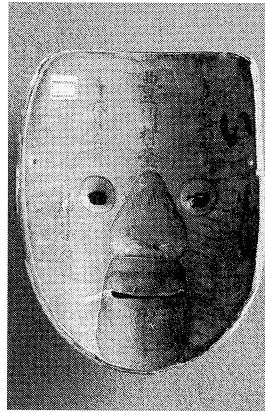
⑤ 獅子口



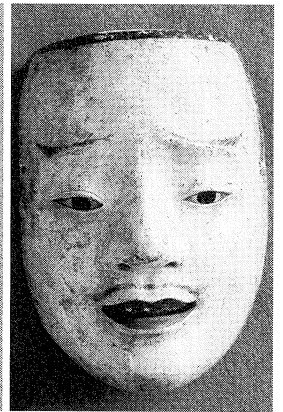
⑧ 小 面 (面裏)



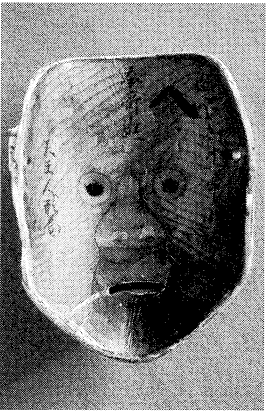
⑧ 小 面



⑦ 邯鄲男 (面裏)



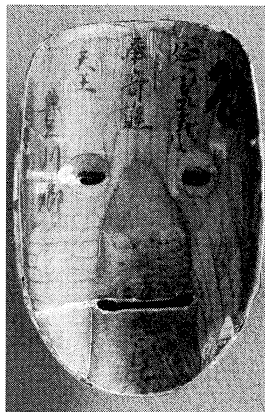
⑦ 邯鄲男



⑩ 瘦 男 (面裏)



⑩ 瘦 男



⑨ 若い男面 (面裏)



⑨ 若い男面



⑫ 黒癭見 (面裏)



⑫ 黒癭見



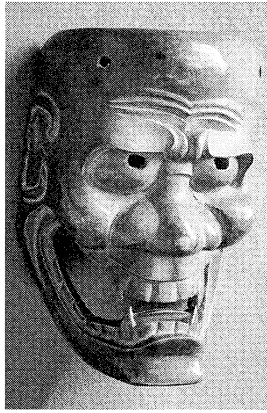
⑪ 小飛出 (面裏)



⑪ 小飛出



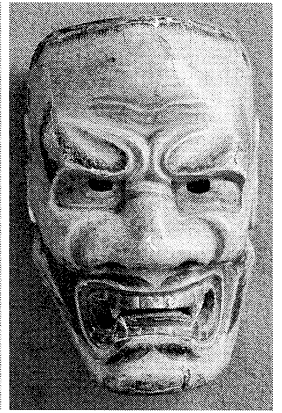
⑭ 獅子口 (面裏)



⑭ 獅子口



⑬ 獅子口 (面裏)



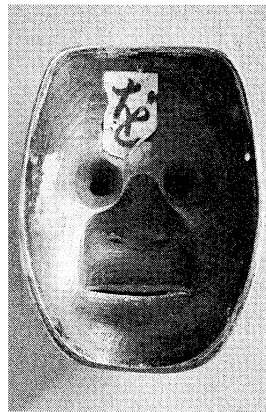
⑬ 獅子口



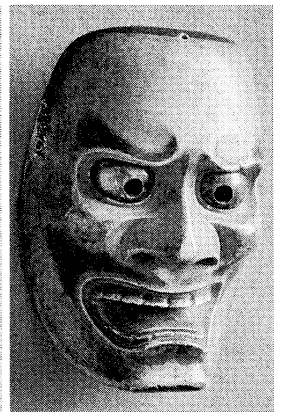
⑯ 平太 (面裏)



⑯ 平太



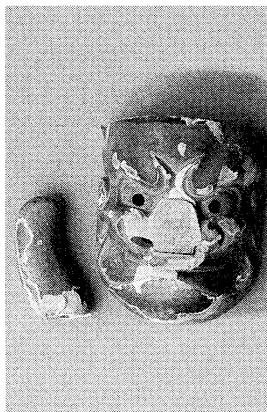
⑮ 黒髭 (面裏)



⑮ 黒髭



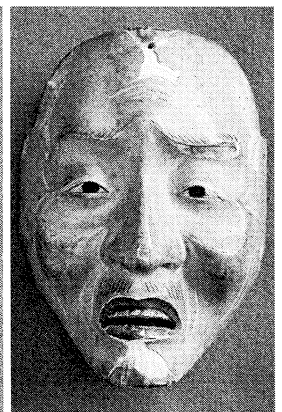
鼻高天狗面
(鼻をつけた所)



鼻高天狗面
(鼻をとった所)



⑰ 小尉 (面裏)



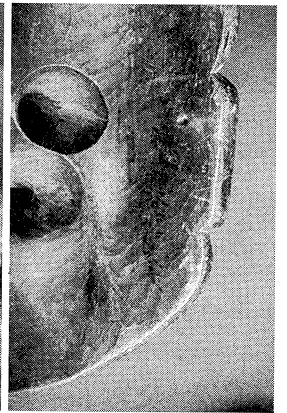
⑰ 小尉



鼻高天狗面（面裏(3)）
「奉寄進 高須重太
夫」の墨書あり



鼻高天狗面（面裏(2)）
「寛文八申年 六月吉
日」の墨書あり



鼻高天狗面（面裏(1)）
「神主 神谷右近太夫」
の墨書あり